
HOLSTER 空葉莢

nakaya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HOLSTER

空薬莢

【Nコード】

N9081X

【作者名】

nakaya

【あらすじ】

二十一世紀中盤。海面上昇により首都を失った日本国家は解体され、米国、中国、ロシアに分割統治をされていた。そんな時代。市民、住民として弾かれた、ホームレスと呼ばれる者の一人として生きる青年が、存在理由を問われ戦う。

新世紀に入ると共に、その国の飢えは加速した。

飽食に慣れきった人々に、我慢、許容などの言葉を耐える強さは無く、等しく貧困が覆い被さると、あっさりと人道主義は放棄された。

東京という名の街が海に沈んで二十年ほどになる。

大きく内陸へと広がった東京湾の一角。

ドブのような裏路地に、一人の少年が生きていた。

「どうした？」

話しかけて来た立派な男に一瞥をくれたものの、少年は、再び目前にある豪邸へと目を戻した。

柵の向こう、緑の芝生の上で、女の子が大きな犬と戯れていた。

「ああいう子が好きなのか？」

女の子の顔が上がった、少年と男に気が付き、少女は家の中へと逃げ込んでいった。

少年の顔が苦渋に歪む、だがすぐに嘲りに変わった。自嘲であった。

娼婦の子として生まれおちた身だった。

保険も無ければ出生届けすら出されていない。

彼は、市民としては数えられる事のない人間であった。

もっともその事に憤りは感じていない。せいぜいが裕福な者を妬む程度で、彼は決して、誰かを憎んだりしてはいなかった。

恨むよりも、盗みを働く方が先であったからだ。

少年は、それでも希望と憧れを持っていた。

この世には、綺麗なものがあるのだと。

自分とは違う、真逆のものがあるのだと。

それは決して、手には入らないし、交わらないし、染まることもできないものだけだ……。。

男を振り仰ぐ。

少し腹の出たその男は、禿頭の黒人であった。

「仕事って、なに？」

たどたどしい日本語で、少年は尋ねた。

言葉に不自由なのは、余り人と話す機会が無かったためだろう。

「……いろいろだ」

と男は口にした。

「訓練と教育、仕事はそれからになる……。そうだな、十年もすれば市民権をやるう」

「十年……」

「耐えられるか？」

少年はもう一度豪邸に目をやった。

ギョツと歯を食いしばり、そして何を心に誓ったのか、シャツの胸元を強く握り、引っ張った。

「……やる」

「そうか」

男は目を細めた。

不憫だとも思ったのかも知れない。

首都機能の麻痺した日本は、政府は、国を外国へと売りつけた。

その際に、諸処の事情から市民としての登録を受けられず、あるいは受けることを拒否した人々は、行政府の庇護を受けられないまま、現在も悲惨な日常を送らされていた。

報道では、元は犯罪者であったり、不法入国者が大半を占めていると誘導されていた。だが、単純に心身の都合や事情で期間内に登録をできなかった者たちもいたのだ。

少年の母親は、後者であった。そして身を売る以外に道を無くし、そして亡くなった。

当たり前の死に方をした一人となったのである。

そして十年。

少年は青年になっていた。

だが今だドブの中に浸かっていた。

「ジム」

彼、ジムは、唯一の上司であるあの男から、シガレットケースを受け取った。

やたらと大きな橋の上だった。欄干にもたれ、風は寒い。

夜の深まりと共に冷え込みもまた増していた、二人は申し合わせたように襟を立てた。

男は茶系、ジムは黒のコートであった。

「今夜だ。取り引きの内容は、薬が五百キロ。ま、そんなものは警察がどうにかする」

黒い顔をジツポの炎が照らし出す。

元は東京湾を横断する橋であったが、今では海面の上昇に伴って中央部分で水没していた。

陸地側のこの部分は、栈橋のように海の上に浮いている。

けたたましく行き交うバイクとギャラリー達は、この先で行われているチキンレースの観戦者である。

「……で、仕事は？」

切り出すジム、細身で、頬もやたらと痩けていた。

目つきが悪く見えるのはそのせいだろう。

黒髪はべたつき、前髪は顔を隠していた。

「細かいことはケースの中だ」

男はシガレットケースを目で差した。

「やつらは高木首相の長女、真美の誘拐を計画している」

シガレットケースには中折りにされた紙がタバコの下に敷かれていた。

「……首相官邸は街を挟んだ反対側だよな？ 随分と手の込んだ罠だな」

紙は首相官邸の見取り図である。

「それだけ今回の誘拐には大きなものがかかっているんだろうさ。で、どうする？」

「どうするもなにも……」

ジムは目を鋭く細めた。

「……俺に話を回すんだ。ただ警備をしろって言うんじゃないんだろ？」

「非合法的な仕事だからこそ、戸籍のない彼の元へと話が回って来るのだから。」

彼の口元に奇妙な笑みが浮かび上がる。

「……主犯は赤き陽の昇る国だ」

「そうか」

何か思う所でもあるのか、ジムは目を閉じて夜空を仰いだ。

「ジャパンが分割統治されるようになって、何年になると思っているんだろうな……」

「九十年代に自らの犯した失策を認められん連中だからな。あがいてるのさ……っと、俺達が政治の話をしてもし方があるまい？」

「……それはそうなんだけど、な」

ジムは下向くと、ケースからタバコを一本取り出し啜えた。

男のジッポを借りて火を付ける。

寒さに背中を丸めた二人は、それ以上の言葉は交わさなかった。

テンミンニツツ。

住宅街から少し離れて、官邸は山の中腹に建てられていた。

山一つが全て敷地となっており、山道は登り口で検問同然のチェックを受けなければ通れないようになっていた。

しかし今夜半、黒いRV車が無言のままに通り過ぎていった。

内通でもしているのだろうか？ 検問所に詰めている警備員との

疎通は、目配せだけで済まされた。

見とがめる者もない中を、車は奥へ奥へと進んでいく。電動なのか天然ガスか、とにかくそのタービンのアイドリング音は低く抑えられていた。寝床に着いている住人の耳につくほどではないだろう。

車はそのまま、邸宅の真正面に停車した。

ファイブミニッツ。

正面玄関が開き、中から手招きする影が見て取れた。

ポチャツとした体形、透け気味の服はネグリジェだろうか？

車から黒の工作服で統一した男達が静かに降りた。

二人だ、顔は暗視ゴーグル付きのマスクで覆い隠している。

車に残ったのは一人だけであった。

人影と合わせて三人が屋敷に姿を消す、それを見計らうように、庭との垣根から誰かが車に近付いた。

ウィンドウよりも低く腰を落として、気付かれないように回り込む。そして素早くマフラーに何かを取り付けた。

それはスプレー缶であった、缶から吹き出したガスがマフラーを逆流し、車内を静かに満たして行く。

ずりずりと、車中の男が尻を滑らせ、意識を失う。

不審者を上回る不審人物は、車内をひと目確認してから、屋敷の中へと潜り込んでいった。

今回の一斉検挙は、米国第五十一州、ジャパン始まって以来の大きなものになるはずであった。

湾岸部はパトカーのランプによって、街中以上の賑わいを見せている。

野次馬の半分は、この地区に巣食うホームレスで、残りは事件を

嗅ぎつけたマスコミであった。

一般人の姿はない。ここは放棄された無法地区なのだ。

「やっぱり変ですよ、部長もそう思いませんか？」

若手の刑事が、上司に問いかけている姿があった。

「だがなあ……、ヘロインは本物だ」

地盤沈下によって傾いているビルたち。だが中には真つ直ぐなままのものもあり、そういったビルは、不審者たちの住み処や、倉庫として用いられていた。

「焦るなよムツキ」

若い刑事は舌打ちを発する。

「……ヘロインが幾らあったって、捕まえたのが小物だけじゃあ、意味が無いですよ。そうでしょう？」

海の側に逃げられたかなと、二人は視線を投げやる。

そこには満潮のために、海面に没しているビル群があった。

中には没しきらずに頭を晒しているものもあったが、まるで墓標であった。

今日は月がないために、不気味な闇に沈んでいるようだった。

「部長！」

大きな声の呼びかけに、二人はびくんと体を跳ねさせた。

「なんだ!？」

「本部からです！ 首相官邸から警報が出ていると」

理解に伴い、表情が切り替わる。

「シット！ こっちは困かつ、ムツキ！」

ムツキはとっくに駆け出していた。

屋敷が大きければ、それなりに人の気配は感じにくくなるし、立派な建物ほど足の音も消しやすくなる。

絨毯が立派であるからだ。

深い毛と靴の底の特殊ラバーによって足音を断ち、侵入者達は気

配を消して進んでいく。

指で合図をし、あらかじめ叩き込んであった間取りを思い出し、目標を探る。

首相は現在本国の会議に出席中、この屋敷には首相夫人と娘、二人だけのはずであった。

つまり、彼らを引き込んだのは、首相夫人である。

夫人は二人を招き入れた後、自分の部屋へと引き上げていった。事件の発覚後、対応などについての内部情報を伝えるように、指示されているからだ。

おおよそ完璧に見える計画だった。しかし既に破綻は見え始めていた。

切られているはずの警報装置は作動していた。ただし作動中を示すランプには黒いビニールテープが貼られ、状態を気付かせないように気が配られていた。

そこかしこにある赤外線センサーは、逐一状況を警察本部へと転送していた。

やがて彼ら二人は、二階にある一つの扉に辿り着いた。

三、二、一、ゴーと指で合図をし、カチャリとノブを回して、一人が入り込む。

その部屋は熊のぬいぐるみなどが飾られている、荒事には似つかわしくない世界であった。

大きめのベッドには、十五・六歳の娘がすやすやと気持ちよさそうに熟睡している。

長い黒髪を持っていた。少なくなった純血の日本人を感じさせる面立ちもしていた。少女趣味が抜け切っていないのか、大きめのピンクのパジャマに、胸にはこれまた大きな熊のぬいぐるみを抱いている。

長女、真美である。

侵入者は真美の鼻先にスプレーを吹き付けた。

「ん……」

寝苦しげに呻きを漏らす、目は覚まさない。

「男は真美の体を担ぎ上げると、ドアを出て、仲間の姿を探した。だがそこに共犯者の姿は無かった。」

「きゃあああああああ！」

悲鳴が聞こえた。

「あの、バカ！」

舌打ちして、男は慌て、廊下を走った。

「きゃあ、きゃああ！ きゃあああああ！」

男は焦った、何故だか仲間が気絶して転がっていたからだ。

それに錯乱している首相夫人の様子からは、彼女がやったとは思えなかった。

では、誰が？

廊下に月明かりが差し込んでくる。

彼女は闇の向こうにいるものに怯えていた。

月明かりに応じて闇が薄まり、そこに一つの人影が見えた。

闇だと思っていたそれは、暗がりには紛れていた人であった。

それは黒いコートの青年だった。黒いパンツに黒いブーツ。

コートの前がはだけられている、その下のタンクトップのシャツも黒だった。

スラリと抜き放たれるナイフは、ナツクルにガードの付いた大物だった。

暗闇の中で鈍く光る。

「ちっ……」

男は真美を担いだままで腰に手を回した。

コートの青年が駆けるように間合いを詰める。首相夫人の脇を抜け、大振りのナイフを横に薙ぐ。

真美を担いでいたために、男は銃を抜くのが遅れてしまった。

ギ、キインと、硬質で耳障りな音が響く。同時にバンと大きな発

砲音も鳴った。

男は狙いを定めるのが間に合わないと思つくと、青年のナイフを銃身で受けて弾いたのだった。だがトリガーに指をかけてしまつていたために、間違えて引き金を弾き、発砲してしまつていた。

跳ね上がった銃口から放たれた弾丸は、天井に小さな穴を穿つて夫人のひきつるような悲鳴を誘う。

閃くように返されたナイフが、真美を担ぐ腕を斬り付ける。

落とされる真美、刃の軌跡に添って宙に糸を引く鮮血。

流れるように動く青年。脂ぎつた前髪が跳ね、彼の顔をはつきりと見せた。

「ジム!？」

月明かりに見えた顔に、男は驚きの声を上げた。

取り落とした真美を諦めて跳び下がる。

目を細めてジムは身構える。知り合いなのか、知られているのか、思案しているようだった。

ジムは口を開きかけて……、結局つぐんだ。

問いただす必要性を見いだせなかったからだ。

一方で男は、腕を真つ直ぐに伸ばし、銃口をジムにも、夫人にも、どちらにも狙いを定められるように、ふらふらとさせていた。

男は撃つべきかどうか、惑つていた。だが急に点いた電灯の明かりに目が眩み、結局逃げ出す方を選んで身を翻した。

すぐ側の窓を割つて外へと転がる。

ジムはまだ離すまいとする夫人の顔に、後ろポケットに入っていたスプレーを吹き掛けた。

「あ……」

どさりと……、夫人は力を無くして倒れ伏した。

「う……」

交代するように呻きが聞こえた、真美だ。

「……だ、れ？」

落とされた拍子に肩を打ったのか、押さえている。

それでも意識はまだ朦朧としているのだろう。目の焦点が合っていない。

ジムは鼻から息を吐くと、張り詰めていた雰囲気霧散させた。無造作な動作で真美の側に膝をつく。彼は彼女の体を抱き上げて、前髪を掻き上げるように撫でつけてやった。

「う、ん……」

嬉しそうな身悶えをして、真美は体から力を抜いた。

不思議と彼の瞳に安堵して。

（おやすみなさい……）

真美はとても穏やかに瞼を閉じる。

「警察だ、動くな！」

ジムは真美を抱いたまま、若い刑事……、銃を構えているムツキへと振り返った。

その目は、元の鋭いものへと戻っていた。

BULLET:1 (後書き)

大昔に書いたものをリメイクしてみます。

この頃は、都市が沈むなんて、海面上昇しかないって思っていました…。

現実には俺の想像を超えてました…。

BULLET:2

翌朝。

「釈放つて、なんでですか！」

ダンツと振り下ろされた拳に、机の上の書類が崩れ落ちた。

食って掛かって来るムツキに、部長であるロインは書類を拾えと目で命じた。

「……上からの指示だ。ついでに彼は、一連の犯行とは無関係だ」

「なぜそう言えるんです」

ロインは、ぷらぷらと手を振って、追い払おうとした。

「気にするな」

「しますよ！」

ビリビリと声が窓を震わせる。

それ程に苛立つ声は大きかった。

「これだけの事件で、逮捕者がゼロですよ？ 奴らまた来ますよ、絶対に！」

「……一人は気絶してたらしいじゃねえか。それを捕まえ損なつたのはお前だろ？」

「目の前に凶器を持った怪しい奴が居るんですよ！？ 銃を下げられるわけが無いじゃないですか！」

「それで、目え覚ました誘拐犯に蹴り飛ばされたあげく、彼に庇ってもらいましたってか？」

恥辱のためか、ムツキの顔が真っ赤に染まる。

それを横目に、ロインはタバコに火を付け、くゆらせた。

「さつさで行け。お前には令嬢の護衛を命じただろうが」

「なんで誘拐犯の追跡調査じゃないんですか」

「頭を冷やせ……、それだけだ」

「くそ！」

ガン！

蹴飛ばされ、マホガニー製の机に、醜い窪みが刻まれた。

「真美！」

「美幸……」

駆け寄って来る親友に真美はげっそりとした顔をした。ばたばたと小走りに駆け寄って来る。

髪は栗色のシャギー入りショートボブ。

変形セーラー服のスカートが、その勢いに大きく広がっている。

その嬉々とした表情を見て、真美は先手を打って釘を差した。

「……お願いだから、もっと詳しく教えてよ、とか言わないでよね」「え……?」

「そんな顔してもダメ！ それにほんとに、口止めとかされてるわけじゃないんだから」

「じゃあホントに寝ちゃってたの?」
「ん……、それもはっきりとしないのよねえ」

つと二人は校舎から校門までの短い距離を並んで歩いた。

並ぶと二人の背丈は変わらない、平均からも小柄な方だ。

真美は本当に困っているといった顔をして首を傾げた。

「薬で眠らされてたらしくって……」

「お母さんは?」

「ん、まあ……」

その点については、護魔化す様な受け答えしかできなかった。

浮気相手にそののかかれて、実の娘の誘拐事件について、片棒を担いだ、などという話を口にできるはずがなかった。

(誘拐と言ってもお金と交換で無事に返すからとか、それで浮気のための小遣いが手に入るだとか、考え方がおかしすぎるよ)

はあっと深く溜め息を吐く。

「どしたの?」

心配げな美幸に、真美は愛想笑いを浮かべた。

「ほんとになんでもない……、つていいんだけどねえ」
困ったように校門に目を向けた。

「あれよ、あれ」

「あれって……、ああ、ムツキさん？」

「やつ」

門柱にもたれかかって、待っていたのはムツキであった。

軽く手を挙げて、親しみのある笑顔を見せる。

やたらと真新しいクリーム色のコートを羽織っているのだが、その下のグレーのスーツは酷くよれてしまっていた。

そんなムツキに真美は気色ばんだ様子を見せた。

「暇人が……、犯人はどうしたのよ犯人は」

何も無かったとは言え部屋にまで踏み込まれたのだ。

一番過ごしやすいはずの自室が、いまは気持ちが悪かった。

そんなわけで、真美はかなりささくれ立っていた。

「俺だって捜査がしたいよお……」

そんなお嬢様に、ムツキはがっくりと肩を落とした。美幸が食いつく。

「外されちゃったんですか？」

「どうせ役に立たないからでしょ？」

「違うっつーの！」

地団駄を踏む。

「部長がなにか隠してやがるんだよ！！ それにお嬢さんと顔見知りなのは俺だけだし……」

真美は不機嫌そうに口を尖らせた。

「いつまでも昔のことを……」

「それって……、地下鉄で補導された時の話？」

その時のことを思い出し、真美は顔を赤くした。

「違う！ 上がったたり下がったりって、よく分かんないホームを作った公団が悪いのよ！！」

あーっと、美幸は何とも言えない表情をした。

「迷子になったんだ」

東京沈没と呼ばれた二十一世紀初頭の混乱、それは海面上昇に伴う液状化と地盤沈下が主な原因となっていた。

これに対し、水没した路線の廃止と再整備は、対処療法的に行われることとなった。

災害は終息したと、何の根拠も無く口にした政治家によって、最初の計画が強行された。

当然のごとく工事は難航した。大都市沈降現象が、なおも続いていたためである。

着工した後も、浸水は広がっていた。何度も計画の変更や見直しが行き返された。

その結果が真美の口にした、『よく分からないホーム』、を作り上げていた。

複雑な通路に、どこに繋がっているのかわからない階段。慣れないものにはまさに迷路であった。

ムツキは諦めるように慇懃に尋ねた。

「それで、今日はどちらにお出かけですか？」

「……そうねえ」

唇に人差し指を当てていやらしく笑う。

「金づるいるから、美幸い、映画でも見に行かない？」

「え、マジで？」

「ちよ、ちよつと待てよ、俺が払うのか!？」

「いいじゃない、経費で落とせば」

「税金をそんな事に使えるかよ!　って聞けよなあ!？」

「やっぱ特撮よね、特撮」

「え〜? 『誘拐』、もうやってるからそっちにしようよっ」

「……あんたね」

「誘拐されそうになったの真美だし」

「わざとだろ?　わざと無視してるだろ、なあ!？」

必死に喚くが聞き入れられない。

女子高生と歩いているというのに違和感が無いのは、精神年齢が近いためかもしれない。

ムツキは二人の耳に聞こえるよう、背中を丸めて訴えた。
「せめて割り勘にしてくれ」

無造作にポップコーンを掴んでは口に放り込んで咀嚼する。

暗い劇場内。映画は今まさにクライマックスを迎えており、逃亡する犯人の車は人質の少女を乗せたままで、峠を鋭く下っていた。

「もう少し静かにしたらどうだ？」

男は……、あの橋の欄干に残った黒人だった。彼は純粹に映画を楽しんでいたので、剣呑な目をジムへと向けた。

「……警察の対応が早過ぎなかったか？ サム」

睨み付けるジム。禿頭の黒人は、大げさに肩をすくめて笑って見せた。

「……今時の警官は、中々仕事熱心だつて事だな」

サムはジムの声音に、仕方が無いと映画鑑賞に見切りをつけた。

「悪いとは思っている。だからこうして、身柄を引き取ってやったんじゃないか」

サムの物言いに、今度はジムが中折れた。

「出してくれたのは、ありがたいと思っっているさ……」

ちらりと扉に目を走らせる。

どの非常口にもスーツ姿の男達が居た。

空席があるにも関わらず立ち見をしている。

「……俺のマークは外せないのか？」

「警察も神経質になってるってことさ」

「そんな時に会って良いのか？」

「お前の身元は『不明』だからな。後でまいてしまえば、俺もまた身元不明の不審者さ。問題無い」

サムは皮肉るように笑ってソフト帽を深く被った。

隣の席に置いていたコートを腕にかける。

「出るぞ」

「そうだな……」

ちょうど映画は、エンディングに突入した所であった。

「ダメですよムツキさん。あの男の尾行はこつちに任せるって話でしょ?」

劇場ホールの売店前で、ムツキは同僚に掴まっていた。

「はあ? なに言ってるんだよ」

突然駆け寄って来た同僚に、きよとんとした表情を浮かべる。

ムツキはくいつと顎で女の子達を差し示した。

「これも仕事だよ、仕事」

だがそれはそれでまづいことであつたらしい。

「あー! 保護命令出てるのにこんな所に、知りませんよ!？」

「わっかんねえ奴だなあ……」

ぼりぼりと頭を掻いて、さらに一言言い放とうと口を開く。

しかしムツキは、ちらりと視界に入った男に言葉を飲み込んだ。

上映の終わり間際に戸をくぐって来た人影に見覚えがあつたからだ。

特にその特徴的なコートには……。

「あいつ!」

ムツキは一瞬で頭に血を上らせた。

黒いコートを着ている青年は、確かに昨日捕まえたはずの容疑者であつたのだから。

「ダメですよムツキさん!」

「離せつて!」

「あれえ、なにやってんの?」

「あいつだよ、あいつ!」

「へ?」

真美は目を動かして、こちらの騒ぎを遠く見ている二人連れに気がついた。

「あの人？」

「あいつだよつ、お前を拐おうとしたのは！」

「え！？」

最初は驚いた真美だったが、次第にその顔を怒りに赤く膨らませた。

ずっと大きく歩を踏み出す。

「文句言つて来る！」

これにはけしかけたムツキの方が慌ててしまった。

「ダメですよ、お嬢さん！」

「あれえ？ どしたの？」

両手にポップコーンのカップを持ったまま美幸も後を追った。

「ちよつとあんた！」

その特別に鍛えられた耳で話を盗み聞いていたジムは、溜め息をつきながら彼女に振り返った。

自分の顎先の高さにある目を真っ直ぐに見返す。

「なにか？」

余りにも鋭い視線と抑えた声だった。

「何かじゃないでしょ！？」

だがそれでも真美の勢いは止められなかった。

飛んで来た真美の唾に顔をしかめる。

「あんなたちのせいで家中泥だらけになったのよ？ どうしてくれるの！」

「文句つてそつちのかい……」

ムツキは一瞬でげそつとやつれた。

「なによ！ 警察は警察で荒らしてくし、掃除するの大変だったんだからね！？ おかげで今日は髪洗えなかったんだから！！」

「朝から髪なんか洗わんでもいいだろう……」

「女の子はそうはいかないの！」

いつの間にもやら、相手がムツキにすり変わっている。

はつとした真美は、改めてジムに指を突き付けようとした。

「あれえ？ お父さん」

だがのんびりとした声に勢いを削がれてしまった。

「なにしてんの？ こんな所で」

ぼかんとした顔で、気まずそうに背を向けている父に首を傾げる。

そして青年にも。

「ジムも？」

「お久しぶりです」

小首をかしげていた美幸であったが、徐々になにかを理解したのか、詰問口調で大声を上げた。

「お父さん！ ジムとなにやってたの！！」

「あ、いや……」

気まずげにサムは身をすくめた。

「ジムも！ またお父さんに、たかっただのね！？」

「いえ、そういうわけでは……」

二人は気まずげに視線を漂わせた。

状況に着いていけないのはムツキたちである。

「知り合いなのか？」

「こそつと美幸に尋ねるムツキ。」

「そっちはお父さん……、こっちは」

美幸はことさらに大げさな嫌悪感を装った。

「ホームレスのおじさん」

「ふえ！？」

ホームレスと言う表現に、真美が反射的な後ずさりを見せた。

この時代、ホームレスという言葉は、二十世紀とは違った意味合いで用いられていた。

九十年代、日本は過剰なまでの税政策を敢行し、これにより住居に対する税金のみならず、あらゆる保険への支払い義務を完遂できない者たちが続出した。

彼らは子が生まれたとしても申し出ない道を選んだ。子供の保育の名目で、さらなる税の支払いを強要されてしまったためである。

消費税なども導入されたが、これは独身者を増やすだけに留まった。

夫婦一方の収入では家庭を支えられず、かといって共働きでは共に過ごす時間が少なくなり、子の面倒を見る時間もない。

婚姻の意味がそこにはないからであった。よほど独身で居た方が収入に対して余裕を持って、楽しめる。

社会としてはいびつになる一方であった。

そんな九十年代の歪みが祟りとなって、日本は米国を中心とした三国へと身売りする事になったのである。

現在、孤児や私生児、あるいは人間としての最低限の権利でさえ求められずにいる少年少女が、海面上昇によって放棄された水難地区に溢れることとなった。

子供達のほとんどは難民となって、米本国へ流れるか、あるいは大陸を目指し半島へ渡るか、あるいはここに独自のコミュニティを形成し、汚らしいものを見るような目で敬遠されて過ごしていた。ホームレスとは、こういった者達のことをひとまとめにする別称となっていた。

(でも……)

真美は盗み見るようにして、ジムの瞳を覗いていた。

(この人が守ってくれたんだよね……?)

でも……と、首を傾げる。

憂いと悲しみ、それに諦め。

眠りに落ちる前に見た瞳とは違うことに、真美はどうしてと訝しむ。

「FBIの……、エージェント!?」

「そうだ」

結局、五人はサムの自宅へと移動した。

リビングのソファーにサムとムツキ、真美と美幸の形で向い合うように座っている。

だがジムだけが一人、窓際に立って庭を眺めていた。

中々に広い庭である。

（懐かしそう?）

真美はジムが醸し出している雰囲気、そんな風を感じ取った。

ホームレスを敷地に立ち入らせるだけでも、なんと陰口を叩かれるのか分からないのが世情である。

実際、美幸も、美幸の母も、彼に対しては良い顔をしなかった。

ムツキが居なければ、間違いなく追い出されていたことだろう。

初対面の人間が居るからこそ、自嘲したのだと想像できた。

（だからかな?）

久しぶりに、上がらせてもらえたのかも知れない。

そのために、懐かしさがこみ上げているのかも知れない。

真美は、そんな風に納得をした。

「こいつが!？」

そんな真美の詮索には関係無く、ムツキは刺すような目をジムへと向けていた。

「じゃあ、夕べのは?」

露骨に責める目を作り、ムツキは隣のサムを睨んだ。

「……情報はあった、だからジムに、万が一に備えてもらった」

「うちに断わりもなくですか!？」

「いや、部長には通してある」

「どうしてこっちまで情報が来ないんです!」

「万が一と言っただろう? 確実でない情報に、警官を割くわけにも行くまい?」

「しかし」

サムは溜め息を吐いて、ムツキの言及を遮った。

「ジム、お嬢さんを送ってくれ」

「室長!」

ムツキはサムへと食い下がった。

「室長はやめてくれ……、FBIと言っても窓際なんだよ」

サムは改めてジムに命じた。

「彼には俺から理解してもらおう。お嬢さんの帰りが遅くなるとまずいからな。頼むぞ? 美幸、お前はお茶を淹れ直してくれ」

「はい」

「ジム」

サムは出て行こうとするジムに一声かけた。

「スペンサーだったんだな?」

瞬間、闇の中で対峙した相手の姿が思い浮かんだ。

顔は見えなかった。だが、驚きから発せられた声は、間違いなく知っている男のものだった。

「ああ……」

重苦しく返事をする。

そうか、と、サムは、タバコを取り出し、火を付けた。

バスにでも乗るのかと思った真美であったが、案内されたのは、さほど離れてはいない表通りであった。

「……助手席に乗ってくれ」

ぶつきらばうな物言いにムツとする。

(しょうがないっか……)

だがその憤慨は溜め息と共に吐き捨てた。先に毛嫌いをして噛み

ついたのは自分なのだから、嫌われるのが当たり前と言つものだと納得をする。

だが、ジムは、そんな真美に、気弱な口調で問いかけた。

「何か……、気に障ったか？」

「別にいい」

4WDのラリーカーであった、色は白だ。

シートもそれ用でとても固く、真美はお尻が上手く座らないのかもぞもぞと動かして、落ち着く位置を探し出した。

反対側から運転席の扉を開き、入ったジムに、そういえばホームレスだつけど、真美は気になったことを尋ねた。

「……免許って持つてるの？」

「あると思うのか？」

返つて来たのはもつともなお言葉であった。

そうよねつと呟きながら、シートベルトを閉める。

だからと言って降りるつもりはないというアピールだった。

「行くぞ」

ジムは真美の視線を感じながらも、車を穏やかにスタートさせた。

美幸の家から官邸までは、それなりに距離があつて離れている。

真美は窓から入つて来る風に、車も良いなと表情を和らげていた。

普段はバスを利用している。首相と言つても選挙で選ばれているだけの人間だ。その娘だからと言つて、たいそうな車で送迎してもらえるわけではない。

彼女の顔は、流れる景色へと向けられている。

だがその目は、ジムを見つめたまま揺るがない。

(やつぱり……、見た事、あるよね?)

小首を傾げて、真美はジムの瞳に焦点を合わせた。

ちらりと横向いた目と視線がぶつかる。

「何か用か？」

ジムの瞳はまた前を向いた。

「……用が無いなら、そう見つめないでくれるか？ 照れる」
キョトンとした後、真美はいきなり吹き出した。

「……そんなにおかしいか？」

「だって……」

「悪かったな……」

ひとしきり笑った後で、真美はふうと力を抜いて口にした。

「ありがと、あの、あなたでしょ？ ……頭撫でてくれたの」
「そうだ」

探るような言葉であったが、ジムはごくあっさりと肯定した。

真美の顔を見ようとはしなかった。

「ね？ それで……、どうだった？」

真美は俯きながら頬を染めた。

「なにが？」

「もう！ あたしの寝顔に決まってるじゃない！」

プツと頬を膨らませてジムを見る。

（え？）

しかし真美は予想外のものをそこに見付けた。

「あーっ、照れてる！」

「知るか！」

ジムは照れを護魔化するように口元を手で覆った。

引きつる口元を揉みほぐしていた。

「なあに照れてんの？」

そんな年甲斐もない照れに真美はくすくすと笑った。

映画に出て来るエージェントのような、感情を殺している面が見られない。

こんなに素直に顔に出ていて、つとまるのだろうかとおかしくなつたのだ。

「もしかして……、女の子抱き上げたの始めて？ 付き合った事も無いの？」

「ない」

ジムはやや憤然としながらもはつきりと答えた。

「どうしてえ？」

ジムは真美の邪気の無い瞳に、冷めた目をしてこう告げた。

「誰がホームレスのことを好きになっただけでくれるんだ？」

それきり、言葉は途切れてしまった。

「あ、えっと……」

鋭く切り付けられた台詞の意味に、真美は謝ることすら封じられた。

帰宅 自室。

真美はベッドに倒れ伏すと、枕を手繰り寄せて頭に被った。

朝の努力の成果なのだろう、部屋の床に泥靴の跡は無い。

「失敗したあ……」

ホームレスと言えば、薄汚いという印象があったのだが、ジムにはそれを感じなかった。

だから油断したのかもしれない。調子に乗りすぎてしまったと思う。軽口にしても、失言だった。

ジムに対しては、生理的な嫌悪感を感じない。

だから、違う存在のように捉えてしまっていた。

普通の人のように思えていた。

だから、普通の人と同じ感性で、言葉の意味を受け取ってもらえると錯覚した。

ジムが自分のことをどう思っているのか、それを考えれば、あれはなかったと思うのだ。

ホームレスを口汚なく言葉にすれば、ジムは同じように傷つくだろう。

FBIのエージェントと言っても、ホームレスとしての自覚の方が強いように見える。

真美は父が首相だから……、と言うわけでもないのだが、噂だけは耳にしていた。

特別な仕事を引き受けて、市民権と戸籍を得るために働いている者達がいるということは。

「ジムが……、そうなんだろうな」

カッコいいと思う反面、やはり先行するイメージがあつた。

誰が好きになる？

その通りなのだ、現実に真美とてホームレスを『同列の人間』として数えられずにいた。

「でも……」

昨夜の眼差し、あれに惹かれる自分も存在している。

「そっか、あれって……」

(憧れ?)

真美は彼の瞳に浮かんでいたものを、そんな風に解釈した。

慈しみではなかったと思う。憧れているものを見る目だと思つた方が納得できた。

「……ジムって、いくつなんだろう？」

とりあえず、真美は答えの出そうな疑問へと、思考を切り換えることにした。

BULLET: 4

真美が枕を胸に悶え出して十五分。

ジムはまだ、官邸の麓で電柱にもたれかかっていた。

もう陽も落ちてしまっている。

脇にはラリーカーを停めている。

ジャパンは米国の州でありながらも、一国のような形態をもって
存続させられていた。

特異な自治区として知られている。

その首都であるこの街は、湾岸部、市街地、そして山が直線上に
並んでいた。

なにをするでもなく時間を潰しているように見える。そんなジム
に、話しかける姿があった。

「仕事熱心なことだな」

声の源に目を向ける。電灯の下に姿を見せたのはムツキであった。

「彼女の警護は俺の仕事だぜ？」

ふんつと鼻息荒く自分を指差す。

ジムは無視するようにタバコに火を付けた。

「てめっ!？」

思わず掴みかかるムツキであったが、食い込むはずの指は、コー
トの意外な硬さに押し返された。

厚いのではない。

硬かった。

ジムは、からむなよと、嘆息した。

「警官は街の平和を守っていればいい」

「だったらてめえこそ大人しくしてる！」

「時間外労働と残業は無駄に税金を消費する」

「だからって、てめえなんかに任せられるか！」

キキイ！ っと、急ブレーキの音がした。

殴りかかろうとしたまま、ムツキは突然の眩しさに目をくらませた。

車のライトだった。二人を照らし、タイヤの音を軋ませたのは、昨日の襲撃者達が乗り逃げて行った、あの黒いRV車であった。

そのウインドウは開かれていた。

覗いていた筒を見て、二人はとっさに、ラリーカーの影に飛び込んだ。

連続した発砲音が鳴り響く。

ボンネットに、扉に、窓に銃弾が弾けて穴を穿つ。

「この！」

二人はまるで申し合わせたかの様に、同じ動作で銃を抜いた。

揃えるように並んで屋根の上で狙いを定める。ムツキの銃は支給品だったが、ジムのものは大口径のマグナムであった。

ガン、ガオン！

ムツキの銃の音は、マグナムの轟音に飲み込まれ、かき消される。「くっ！」

走り去る車に舌打ちして、ジムは穴だらけになった車に乗り込んだ。

「ちっ！」

ムツキも助手席へと飛び込む。

割れた窓ガラスの破片が尻に痛かった。

キキユ！

タイヤを軋ませて、車はターンをする。

銃を握ったままハンドルを操る動きに慣れを見て、ムツキはぶすつと口を尖らせた。

「そのマグナム、携帯許可はあるのか？」

「ない」

「この車は？」

「スクラップから組み上げた」

銃撃戦になるかも知れない。だからシートベルトはかけられない。

ムツキは足をダッシュボードに押し付けて体を固定し、ジムの鋭い目を盗み見た。

(まるつきり、法を無視してやがる。こいつ……)
あるいは法というものを知らないのか、守るべき理由を持たないのか？

そんな考えが、ムツキにジムの生い立ちを想像させた。

「あいつは昨日の残りか？」

「だろうな」

ジムの目はガソリンの残量に向けられていた。

まだ走り出して間もないのだが、ホームレスのジムである。ガソリンはいつも尽きる寸前だった。

ムツキも気がつく。

「……やばいのか？」

「向こうは電気駆動との両用らしい……、燃費を考えても」

「なら無理矢理でも停めるしかないな、右に出られるか？」

「やってみよう」

ジムはさらにペダルを踏んだ、過給器が大きく悲鳴を上げる。

いくら夜の都市外縁部とはいえ、街中であることには変わりはない。

深夜でも無いので交通量も少なくは無かった。

当然、追跡行は先を走るRV車が、一般車両を割って進むことになる。

それに対して、追いかける側は楽なものであった。先行が空けた道に割り込めばいいだけなのだから。

ジムはそれを読んだ上で急加速をかけた、一気に間を詰め、右車線から左に切り換えようとしたRV車のテールをノーズで小突いた。RVは後部を滑らせて安定性を失った。

その立て直しに手間取っている間に、ジムは間隣、右車線を占領して見せた。

「このっ！」

ムツキは小さなリボルバーをタイヤへ構えた。弾層に込めていた六発全部をそこへ撃ちこむ、路面やフェンダーへ逸れたものの、五発目だけが何とか意図した通りにタイヤに当たってバーストを招いた。

キキユツ！ つという音。ゴン！ つと衝突音。

安定性を欠いたRV車は、歩道側の常緑樹へと突っ込んだ。

ジムがブレーキを踏む。元々タイヤのグリップ力が足りていなかったのか、滑るように横に向いて停車した。

「死んでないだろうな！」

ムツキは、自分でやっていながら、舌打ちした。

ボンネットが折れ曲がり、木がエンジンルームの半ばにまでめり込んでいる。

二人は車を止め、警戒しながら中から降りた。暫く様子を見る。しかしなんの動きもない。

頷き合ってから、二人は姿勢を低くして近寄った。

官邸。

「バカモンがつ！」

怒声が落ちた。

雷にも匹敵する罵声でもあった。

「お前達の仕事はお嬢様の護衛だろう、何をしていたっ！」

「しかしですねえ!？」

「俺のミスだ」

ロインとサムの怒りに対し、ムツキとジムは対照的なまでに違う態度を見せていた。

犯人を捕まえて官邸に戻って来た二人を出迎えたのは、官邸につめかけている警官隊であった。

「いきなり撃つて来たんですよ？ 野放しにしておけますか！」

「どうしてお前はそう気が短いんだ！」

黄色いテープが張られ、赤色燈がいくつも回転している。
ジムはギリッと唇を噛んだ。

「……ミスは取り返す」

「当たり前だ」

そう言ったのはサムである。

ムツキ達を置いて、ジムとサムは少し離れた。

「美幸が何か知ってるそうだ」

「わかった」

「おい、ちよつと待てよ！」

置いていくなとすがるムツキを、ロインが捕まえる。

「お前はダメだ」

「なんでだよ！」

しばし睨み合うムツキとロイン。

バックではパトライトが目を痛くさせている。

「……警官だと言うことを思い出せ」

ロインが搾り出した言葉はそれだけであったが、ムツキにはなによりも効く言葉であった。

そんな彼らを置き去りにして、ジムとサムは、サムの車へと歩み寄った。

「美幸」

「ジム！」

サムの車の中で小さく震えていた美幸は、戸を開けて話しかけて来たジムの首にしがみついた。

「どうした？」

そんな彼女の背をなでつける。

互いに、昼間とは百八十度態度が違っていた。

美幸はジムに信頼を見せ、ジムは美幸を慈しむように抱きしめる。

「真美が、真美が……」

「わかってる。俺のミスだ」

髪を擦り付けるように首を振る美幸。

「真美、ジムに謝りたいって言って……」

「謝る？ なにを……」

心当たりがなく、ジムは怪訝そうに首を傾げた。

「……ホームレスだからって、恐がっちゃったって、電話で」

「ああ……」

納得と苦笑を同時に漏らす。

「美幸こそ……、こんな所を見られたらまずいだろう？」

「うん……」

美幸は惜しげに体を離した。

目は涙で赤くなってしまうていた。

そしてその顔は、再び泣き出す寸前であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9081x/>

HOLSTER 空葉莢

2011年10月28日03時10分発行